

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 12 号

平成 15 年 4 月 20 日

発行所 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

パウロの手紙より (1)

パウロ

新約聖書を構成する手紙の内、ローマ人への手紙、コリント人への第 1、第 2 の手紙、ガラテヤ人への手紙など重要な手紙の筆者。

小西先生「ローマ人への手紙講解説教」によれば、「キリストの元祖はパウロ。元祖とは、始めてその教えを味わって教えた人。『キリストの贖いを信じたら永遠の生命を受けて、復活する者となる』と始めて味わって説いたのがパウロ。このキリストの福音を製造したのは、キリスト。神、キリストといえ、福音の「author」、製造者。それを始めて飲んで、その効き目がわかって、これを人々に勧めたのがパウロ。」

半田元夫著「聖パウロ」(平凡社)の年表を基に記せば、パウロの年譜はおおむね次の通りである。

紀元 5 年頃 この頃キリキア州タルソスで生れる。

ユダヤ教徒として成長する。

エルサレムに上り、律法学者ガマリエルの元で、ユダヤ教の厳しい戒律を学ぶ。

30 年 イエス召天

この頃、キリスト教徒を迫害する。

31年 この頃、ステパノの殉教に立ち会う。

32年 キリスト教徒迫害の途中、ダマスコで回心。

39年 エルサレムにおいて、ペテロとパウロが始めて会う。

ペテロ、アンティオキアに赴く。

43年 パウロ、アンティオキアに到着。バルナバと協力して、伝道
を続ける。エルサレムに滞在（～44年）。

48年 第1回伝道旅行（～49年）

49年 エルサレムで「使徒会議」ひらかれる。（～49年）

50年 第2回伝道旅行（～53年）

51年頃 テサロニケ 書（コリントで執筆）

53年 第3回伝道旅行（～58年）この頃エペソ騒擾事件おきる。

53～55年頃 ガラテヤ書（エペソまたはマケドニアで執筆）

55～56年頃 コリント 書（エペソで執筆）

56～57年頃 コリント 書（ピリピで執筆）

56年頃 ロマ書（コリントで執筆）

58年 エルサレムにて、逮捕される。

カイザリアに、2年監禁される。

61年 ローマへ護送される。（～62年）

62年 ローマ到着。ローマにて幽閉される。この間「獄中書簡」
（エペソ書、ピリピ書、コロサイ書）と呼ばれる活発な文
書活動を行う。

64年 ローマにて殉教。

なお、パウロ書簡が、いつ頃、どこで書かれたかについては、諸
説があるので、後ほど、いくつかの説を紹介します。

ローマ人への手紙より（１）

１章 16・17 節

私は、福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり、信仰に至る。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。

２章 6 ~ 10 節

神は、おのおのに、そのわざに従って報いられる。すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄と誉れと朽ちぬものを求める人に、永遠の命が与えられ、他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激しい憤りが加えられる。悪を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、患難と苦悩が与えられ、善を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、光栄とほまれと平安とが与えられる。

3章 21 ~ 26節

しかし今や、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、現わされた。

それは、イエスキリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは値なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。

神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった。

こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じるものを義とされるのである。

3章28節

私たちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。

3章31節

すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。

5章 1 ~ 5節

このように、私たちは、信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導きいれられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。

それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを知っているからである。そして、希望は失望に終わることがない。

6章 11 ~ 13節

このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだものであり、キリスト・イエスにあって、神に生きているものであることを、認むべきである。だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず、またあなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされたものとして、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。

7章15～20節、24～25節

私は自分のしていることが、わからない。なぜなら、私は自分の欲することは行わず、かえって自分の憎むことをしているからである。……

そこで、このことをしているのは、もはや私ではなく、私の内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、私は知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。

すなわち、私の欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。

私は、なんというみじめな人間なのだろう。だれがこの死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

8章10～11節

もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。もし、イエスを死人の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせた方は、あなたがたの内宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう。

8章18節

私は思う。今のこのときの苦しみは、やがて私たちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

8章28節

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、私たちは知っている。

8章35～39節

だれが、キリストの愛からわたし達を離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。……

しかし、私たちが愛して下さった方によって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。